春岡村の伝説

●出戸橋の塚について

東大宮駅へとバスに揺られていると、出戸橋の左手に竹が生えた大きな「塚」が見えてきます。昨年、手前の梨畑がなくなり、見晴らしがよくなって、気付いた方も多いのではないでしょうか。いったいあれは…古墳？

じつは…

江戸時代、見沼代用水の掘削工事で出た土を盛った「塚」なのです。てっぺんには、大正十三年と記された御嶽講の石碑、中腹には、御嶽神社の木造の祠、麓には、明治時代に村人たちが寄進した手水石があります。塚の大きさは『さいたま市文化財調査報告書さいたま市の塚調査』によれば、径三二・八×三一・六、高さは六メートルです。

さて、時は享保十二年（一七二七）暴れん坊将軍吉宗公の時代。幕府の財政難を解消するため、様々な政策を打ち出した吉宗公ですが、年貢米の増収を図るべく、新田開発に乗り出しました。水田に必要な水を確保し、溜池を干拓して新田にするため、井沢弥惣兵衛によって見沼代用水の工事が始まりました。

工事を開始してわずか半年で見沼代用水東縁は完成し、享保十三年春、新しくできた田んぼで田植えが行われました。

水路の掘削は、それぞれの村が丁場を区切って分担しました。掘削で出た土は、堤を築いたり、窪地を埋めて平らにしたりするのに利用されました。丸ヶ崎村の丁場では、掘った土が余ったので、出戸橋脇の地主が土地を提供し、その土で「塚」を築いたというわけです。

この工事では土を運んできた村人たちに賃金が渡されました。地主さんの話では、荷車一台につき寛永通宝一枚でした。この家の納屋には、かつて寛永通宝の入った黒光りする木箱があったそうです。大きさは三十チン角で、上部に手が入る丸い穴が開いていました。ちなみに、片柳村では、銅貨の入った大きな甕のなかに手を突っ込み、銅貨をつかめるだけつかんでよかったそうです。

それにしても、財政難の幕府にとって財源はどこから出たのでしょう。見沼田んぼの新田開発には、江戸町人の越後屋、野上屋、猿島屋の三人が関わっていて、幕府はこの三人から工事費の融通を受けたと考えられます。

（平山由喜）

※二枚の写真は、旧出戸橋から塚を見上げたものと、塚の頂上から16号方向の眺望です。